

| | |
|--------------|---|
| Title | 「教育」という言葉の裏側 |
| Author(s) | 辻, 明典 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 17 P.22-P.24 |
| Issue Date | 2011-10-15 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/4579 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「教育」という言葉の裏側 辻 明典

「せんせい、生徒に話し合いをさせるよりも少しまじめに授業をやった方がいいと思うよ？」

学部4年生の時、哲学教育のまねごと(?)かもしれないが、教育現場で対話型の授業を試みた時に、一人の生徒からでてきた言葉だ。私は、この言葉が忘れられない。

「学校」という空間において、ほとんどの場合、「問いかけ」や「答え」、ときには「規範」でさえも、教師から子どもたちへと一方的に伝達される。教師の言葉にひたすら耳を傾け、唯々諾々とそれを受け取る姿が、生徒のあるべき姿であるとされ、ときにそれは美德とすり替えられる。

さらに「学校」という空間は、問いを「あやふや」な状態に留めておくことを、なかなか許そうとしない。「学校」は教師たちに、生徒たちの議論をまとめ上げ、最終的には授業を上手く締めくくると、強制力をはたらかせようとする。それを受けた教師たちは、正解のない議論であっても、なんとかそこに落とし所を見出そうとする。

私は、この「学校」という空間や、

そこに潜んでいる「教育」という前提を問い直したい。哲学を学校教場の中で取り扱おうとする現場に足を運ぶたびに、この問いと真正面から向き合う必要性に迫られる。高等学校における「倫理」の授業のように哲学史をなぞるのではなく、言葉を交わすことによって哲学的に考えるという経験は、ときに「学校」や「教室」という空間が生み出そうとする思考の習慣を問いただす。問いただされているのは、教師と子どもの関係性であり、子どもと子どもとの関係性でもある。

「変化すべき対象は子どもたちであり、それは大人たちではない。」
「大人は子どもたちに、完成された『答え』を用意しなければならない。」

子どもたちとの対話を通して、そういった声が「教育」という営みの中に潜んでいたという事実が、ぽろぽろと零れ落ちていく。対話によって哲学を学校教育で試みようとする経験は、「教育」という言葉の裏に潜む、その「前提」とされてきたであろうものの一端を浮かび上がらせようとする。

「子どもは未熟な存在だ…」
「教師は明確な『答え』を用意し

なければならない ...」

「子どもたちが、非道徳的な結論
を用意したらどうする ...」

「議論に教師は介入し、子どもた
ちを導くべきだ ...」

学校では、こういった問いかけや不安が存在することを「前提」として、「教育」という営みがスタートしているのかもしれない。これらが、「教育」という言葉の陰に隠れ、非常に見えにくくなっているような気がしている。学校で哲学をするという営みには、こういった問いが「教育」という言葉の裏側に存在しうるということを、私たちに気付かせる瞬間がある。

対話という経験を通して異質な他者の言葉と出会い、自身の思考の枠組みがぐらぐらと揺さぶられつつあることを自覚する。その揺れ幅が大きければ大きいほど、言葉を紡ぎだすことは困難を極めるだろう。無理に結論を用意することは、ここでは求めている。あくまで思考の基盤が揺さぶられ、自身の思考が相対化されていることを自覚すること自体が、目的なのである。

言葉を交わして哲学することを学校教育でおこなおうとすることは、想像以上に困難なのかもしれない。これを試みようとするとき、私たちは「教育」の「前提」とされているものにぶつか

るだろう。これと衝突するとき、私たちはそれにひれ伏し、「学校化」されるという道を選ぶかもしれない。答えない問いと対峙することに耐えきれず、哲学的思考を放棄するかもしれない。一年前、私も学校で授業をするという立場にたった瞬間から、知らず知らずのうちに、自らを「学校化」するという道を選択してしまっていた。〈話す - 聴く〉〈問う - 答える〉という経験を子どもたちに提供し、明確に一つの答えを見いだせないテーマについてディスカッションをさせたとしても、こじつけてでも何らかの結論にたどり着こうとする自分を見つけてしまった。

洛星高校での試みのなかで、「教育」という言葉の裏側をえぐり出す瞬間に、私たちは出会った。ある日から私たちは教室で、車座になって腰を下ろし、毛糸をまくという共同作業を通して一つのボールを創り出し、共通の対象について話し合いはじめた。「ボールを持っている人の話に、耳を傾ける」というルールのもとで、進行役と子どもたちの関係はフラットな状態へと近づいていく。子どもたちが言葉に詰まり、沈黙が訪れたとき、私たちはそれに寄り添いながらも「何も知らない」ふりをすることもある。悩み、もがき、沈黙する子どもたちに私たちは

寄り添い、彼らはなんとか言葉を紡ぎだそうとする。この空間において、「答え」や「規範」は教師や進行役が用意するものではない。そこで紡ぎ出される言葉の方向性は、誰にも分からない。議論がある一つの結論に収斂していくことは、ここでは求めていない。異質な他者との出会いを通し、自らの信念の基盤が揺さぶられていることを自覚すること自体が、この場所では重視される。

哲学を学校で行おうとする試みをすればするほど、これまで私たちが「教育」をどう捉えようとしていたのかという問いと直面せざるを得ない。そう私は感じている。それは、学校という場所で哲学をするということがそうさせるのかもしれないし、特に現在の取り組みがそれをさらに促しているのかもしれない。

(つじ あきのり)

